沖縄の想い出

1965 年卒　黒田 洋一郎

沖縄には TWV の沖縄企画の前にも後にも、何回も行った。最初は、駒場の 1 年の秋休みでの趣味の蝶取りが目的だった.八重山群島西端の与那国島に 3 週間閉じ込められたなど、この最初の旅での沖縄関係の体験は、80 歳になった今思うと、私の人生を大きく変えた旅だったようだ。

多分、第 2 回沖縄ワンデリング（以下 W）に参加し、ほぼ同じように感じた、同期の江村洋のことは、『山路』2023 年版に追悼文を書いたので参照されたい。この「沖縄の想い出」原稿は、当時から大体出来ていたのだが、掲載が遅れてしまった。

1. 1961 年：蝶採りの旅：与那国島に 3 週間閉じ込められる

当時沖縄は本土復帰前で、米軍政下で渡航するには米軍からのビザが要った。都庁の窓口にビザ申請に行くと、窓口の人が「大学生さんは米軍が警戒して、原則ビザは出さない。一体何のために、わざわざ沖縄に行くのか」と訊くので、正直に「蝶の採集です」と答えると、破顔一笑、「そんな目的なら、ビザは出るかも知れない」と言って8枚コピーの英文申請書を呉れた。結局ビザは出て、ドルも替えられた。当時我が家は、父が会社と喧嘩して辞めたので、豊かではなく、渡航費は家庭教師で稼いだ僅かな金しか持っていなかった。今は無いが、東京駅 14 時 12 分発の門司港行きの鈍行に乗った。通勤通学時間を除きガラガラで、ゆっくり寝れた。山陽本線もゴトゴト走り、翌日の夜に門司港に着くと、鹿児島本線回りの鈍行が待っていて、乗り換えた。また南に走りに走り鹿児島に着いたのは翌日。ここから沖縄行きの定期船に乗り換え、結局那覇に着いたのは 4日目、長い旅だった。私は中学生の頃から、京浜昆虫同好会に属していて、同会から沖縄の昆虫屋として、東平地さん（改姓後は東さん）を紹介されていた。彼は当時、那覇の琉球植物防疫所に勤めておられたので、港で会って、親切に家に泊めてくれた上に、こことここで採集しろと教えてくれ、予定が立った。本島北部の南南城(なんなんぐすく)でフタオチョウを狙った後、八重山の石垣島に船で行った。石垣市内から北へバスで行ったカーラ山では、美しいコノハチョウが採れ感激した。丁度、与那国島行きの船が出航すると言うので、まず西端から行こうと思った。これが「3週間島流し」の始まりだった。与那国島の中心の町、祖納に着くと、「東京から来た人は、こっちだ」と佐久川という旅館に連れて行かれた。チャントした旅館ではなく、米屋が本業で、畳敷の客間があるので、本土からの旅行者は皆ここに泊まるらしい。翌朝起きると、早速捕虫網を持って飛び出し、蝶採りを始めた。宿のオバサンが呆れて言うには、「昨年も貴方のように、朝食後網を持って飛び出した東京からの客がいた。実は本土でも有名な小説家だったそうだが、宿帳に本名の斎藤宗吉（註：北杜夫の本名）と書いていたので気付かなかった。惜しいことをした。サインでも貰っておきたかった」と嘆いた。その日の昼からは、祖納最大の豊年祭が行なわれ、翌日には船が石垣に帰るはずだった。ところが生憎、季節が変わり北西の季節風が強く吹き出した。祖納の港は珊瑚礁に囲われており、一カ所だけ空いている所を船はギリギリで通過する。季節風が吹くと、そこに三角波が立ち、船は出せなくなるのだ。翌日も、その翌日も季節風は止まない。蝶の採集だけでなく、観光もできると、初めは喜んでいた。夕食後は、同宿だった平山輝男　都立大助教授（後に教授）から「与那国方言が古い平安以前の日本語を残している」など、興味ある話も聞くことが出きた。宿の高齢のオバアさんが、調査対象者であったが、彼女は「海岸に“クツ”がある」と与那国方言で言う。しかし、“クツ”とは「コツ」のことで、（O 音は昔の日本語にはなく、U 音に転化するのだ）ヒトの死体は海岸の洞窟に曝し白骨化してから、墓に埋葬するのである。

目次へ移動→

この時から、同期の江村洋さん(『山路』2023 年版の追悼文参照)ではないが、沖縄の文化人類学にも興味を持った。

だが 1 週間も経つと飽きて困った。駒場の授業ももう始まってしまう。こうなると、まるで『平家物語』にある、鬼界ヶ島に流された、あの俊寛僧都である。毎日島で一番高い山に登り、東の方を眺めた。後に訪れた、西表島の山並が、水平線上に微かに眺められた。とうとう3週間が経ち、季節風もようやく止んだ。宿のオバサンは親切な人で「たまった一日 1ドル 50 セントの宿代は、今払わなくても良いから、出来るだけ早く東京の大学に帰りなさい」と言い、石垣ー那覇の飛行機代まで貸してくれた。東京に帰ると、父母がすぐに、借金を返せと煩い。私も何か御礼をと考え、思いついたのは、ドクトル・マンボウこと北杜夫さんだ。従兄弟の金子勝昭さんが出版社に勤めていたので聞くと、住所を教えてくれた。往復ハガキで「拝啓:北杜夫様」と事情を書くと、返事が来て、市ヶ谷と四谷は近いので、四谷の斎藤精神科病院を週 1 回手伝っているので、病院で診療後に会ってくれることになった。当日は時間が早かったのか、待合室には患者が残っていた。驚いたことに、患者と付き添いが 2 人並んで座っているのだが、どちらが患者で、どちらが付き添いなのか、全く区別できなかった。当時私の医学知識は一般並で、精神病患者は見るからにオカシイ人と思っていたのである。しかし、診療が終わり、「黒田さんどうぞ」と診療室に通されると、もっと驚いた。今まで、冷静に患者を診ていたはずの斎藤宗吉先生が、おかしくなっていたのだ。油汗を流し、「ボッ、ボッ、僕は、タッタッタ、オオゴマダラしか採れなかったのです」とドモリ、人が変わってしまった。この急変は、理由は分からなかったが、脳の変化だろうと思った(養老孟司さんの名著『唯脳論』青土社、1967 年参照)。その頃は蝶だけが面白かったが、ヒトの脳も面白いと直感した。後に DNA からヒト脳への転向、分子遺伝学から神経科学に研究分野を大きく替える、元々の動機となった。今日まで私が脳神経科学が専門で、良い研究費を貰って記憶の脳内メカニズム、アルツハイマー病、発達障害の原因などを十分研究できた、その濫觴である。ドクトル・マンボウ先生に感謝、感謝だ。あがっていても、先生もやはり、与那国島や佐久川旅館が懐かしかったのであろう、著書にサインをしてくれ、無事オバサンに借金と共に送ることができた。十数年後に、祖納に行ったとき、直接会って御礼を言おうと思っていたが、もう佐久川旅館は潰れていて、関係者は夜逃げ同然で居なくなっていた。「今は昔」である。

石垣からは生まれて初めて飛行機に乗った。これも、私の人生観を大きく変える事件となった。沖縄については、藤野さんから指摘されたのだが、TWV 駒場顧問だった故田村二郎先生の「恩納岳」という文が、『巻機山荘』4 巻、1973 年に出ている。田村先生と言えば 1 年下の宮本主将の学年と特に親しくしていた。また、娘さんも TWV に入り、飯豊縦走企画 W で一緒だった。朴差岳山頂付近で、一面のカタクリの花の群生を見たこと、磐越西線の駅近く、鄙びた温泉に浸かり、縦走の汗を落としたこと、などが想い出される。「恩納岳」では、先生が授業で琉球大に行ったときの沖縄の経験が、さりげなく綴られていて、あの先生の暖かい人柄が偲ばれる。ともかく沖縄の人は親切で、市内見物に行った先生がバスで帰るとき、先生が琉大宿舎に泊まっていることを知った運転手が、路線を変えてわざわざ宿舎前まで送ってくれたそうだ。沖縄の人は、自分が思ったことは、例え会社のルール違反であっても、決断して自分で実行してしまうのだ。

私の経験も、そうだったようだ。那覇空港に着き、タラップを降りると、客室乗務員(当時はスチュワーデスと言った)に突然、「ヒマがあるなら、お茶を飲みませんか」と誘われた。「沖縄美人とお茶」は、断るわけにもいかない。ところが面と向かうと彼女は真顔になり「貴方は知らないでしょうが、米軍政は沖縄人に、こういうことも、ああいうことも、悪いことを数々していると実例を詳しく話し、本土の人々に是非伝えて下さい」と切々と訴えた。私はその頃社会・政治には無知同然だったので、蝶採りなどで沖縄に来てしまい、恥ずかしくなった。この時、社会や政治の問題も、これからの人生では、真剣に考えようと決心した。伝え聞くと、彼

目次へ移動→

女は米国に留学しており「米留（べいりゅう）組」と呼ばれた沖縄のエリート女性だった。琉球航空は米軍の子会社で、英語が上手い背の高い美人の彼女がスチュワーデスに採用されたのであろう。

2.　1963 年：TWV 第 2 回沖縄ワンデリング

こんなことも有り、駒場 2 年の時、沖縄 W を企画した。同期の江村さんに相談すると、直ぐに賛成してくれ、サブリーダーを引き受けてくれた。沖縄 W は、TWV では第 1 回を 1962 年卒の岡崎一夫さんが、1960 年 9 月に、3 年岡崎一夫（L）、2 年弘中義夫、大垣嘉春、加藤諦三、1年黒岩徹でやっており、今回の 2 回目は楽だった。江村さんと一緒に岡崎さんの所にも予め相談に行ったが、団体渡航にはしかるべき身元引受人が必要だと言い、沖縄の東大赤門会を紹介して呉れた。暑すぎず、登山／旅行に適期だった 1963 年の春のスキー合宿の後に、沖縄に行くことにした。メンバーもかなり集まり、3 年黒田洋一郎（L）、江村洋（SL）、平田光広、2 年大野義和、1 年井深幸男、渡辺雄司、藤野浩一、鈴木太平、榊原髙之、道本、川上、福永だった。前述した 1961 年の最初の個人の沖縄貧乏旅行と異なり、TWV 企画のときは東京駅から急行霧島で鹿児島に向かった。東京駅では、家族やTVV 部員から外国遠征並みの盛大な見送りを受けた。そんな中で妹さんなど家族の見送りを受けた榊原さん（有名な心臓外科医の息子）が、煤けたアルミの大鍋をキスリングの上に付けていたのは、いささか気の毒だった。当時はオカズを作るときは鍋が主力で、総勢11名のこの沖縄企画 W で は、大鍋が必要だったのだ。鹿児島では山の手にある、平田さんのオバアさんの家の庭にテントを張らせて貰い泊り、翌日那覇行きの船に乗った。那覇港の税関では、農学部に留学していた渡嘉敷さんのお父様が税関長をしていたためもあるのか、通関はスムースだった。那覇では、首里の琉球大の校庭に、琉球大 WV 部長平良先生のお世話でテントを張らせて頂いた。平良先生を混えて、琉球大 WV との懇親会もやったと思うが、良く覚えていない。琉球大 WV と TWV の交流は、詳しい藤野さんが、いずれ何処かに書いてくれるであろう。

懇親と言えば、身元引受人になってくれた沖縄の東大赤門会の西銘順治さん（当時那覇市長、後に沖縄県知事、衆議院議員）には、特にお世話になった。那覇に居たある夜、リーダーの私と江村さんを桜町の料理屋に呼び出し、沖縄料理をご馳走してくれた。酔った西銘さんが、わらべうたの1つである。“てぃんさぐぬ花”を教えてくれた。“てぃんさぐぬ花”とは、鳳仙花のことで、その赤い花びらの汁を爪先に染めて遊ぶように、親の言うことは心に染めよとの教訓歌だ。八重山出身の名歌手、夏川りみが教訓歌にもかかわらず、良く歌っていた。また江村さんの父上が商船三井のお偉方だった関係で、現地の海運会社の社長もご馳走してくれた。まだ農芸化学科に進学していなかったので、後に酒の神様こと、坂口謹一郎先生の孫弟子、矢野圭司助手（後に長岡技術科学大教授）に飲みに連れて行ってもらったとき言われた言葉、「ここは俺が払うが、世間に出たら.ただ酒は飲むな」は、まだ知らなかった。今思えば、大学に居た頃は、いわゆる学生特権に溺れていた。

3.　沖縄の山野：西表、仲間川、仲良川横断失敗と祖納の浜キャンプ

沖縄の山は、高くは無いが、緑は豊かだ。先ず名のある山の代表は、本島の恩納岳（おんなだけ）で、標高 363m .沖縄本島のほぼ中央部に位置し、沖縄の名山として知られ、琉球王国時代から文学の題材とさ

第 2 回沖縄ワンデリング：与那覇岳頂上にて

目次へ移動→

れてきた。沖縄戦終結後に米軍基地として接収され、一般人の立ち入りは制限されている。私たちが実際に登山したのは、沖縄本島では与那覇岳（よなはだけ）だった。この山は、北部の山地：山原（やんばる）にあり、標高 503m で沖縄本島の最高峰である。山頂域はイタジイ、イジュなどの常緑照葉樹の森に覆われており、天然記念物ノグチゲラやヤンバルクイナなどの鳥が生息していて、現在は「やんばる国立公園」の一部を成し、2021 年には世界自然遺産の「奄美大島、徳之島、沖縄島北部、西表島」に指定された。与那覇岳は標高が高くないので、暑かったが簡単に登れた記憶がある。私たちは行かなかったが、東麓一帯は米軍の北部訓練場で、ヴェトナム戦争中はジャ ングル戦の訓練をした。現在も、ヤンバルの自然を保護するために、高江地区周辺の米軍ヘリパッド建設中止を求める住民運動がある。詳しくは、松本英樹氏の論文『沖縄における米軍基地問題』「レファレンス」2004 年 7 月号、日本図書館協会を参照。

なお、沖縄県内では、石垣島の於茂登岳（おもとだけ、標高 526m）が最高峰で、西表島には、古見岳（こみだけ：標高は 469m で西表島最高峰）がある。

第 2 回沖縄 W の目玉は、西表島の仲間川ー仲良川横断計画であった。マングローブが岸に茂る仲間川を小舟で遡り、上流で上陸、西に向かい、藪コギで仲良川沿いに下り、白浜に出る予定だった。しかし、この当時は、米軍航空測量の不明確な地図の青焼きコピーしかなく、現地では森が生い茂り、樹に登っても視界が利かず、結局、ヤブコギ横断は諦めた。後にヤブコギ横断に成功した探検者は何人も居る。

諦めた私たち TWV 隊は逃げ道として予め決めてあった、北にある営林署の造った通常の横断路（第

仲間川遡行

1 回沖縄 W 隊も通った）に出て、西海岸の祖納に向かった。横断路には、予想通りヒルが多く、皆血を吸われた。途中の星立部落の近くには、ヤシの群落があり南国情緒満点だった。祖納に着くと、観光客の全く来なかった頃なので、浜に自由にテントを張れた。祖納の浜の美しさ、海産生物の豊かさは素晴らしく、皆で楽しんだ。夜は、部落の人々が歓迎会をやってくれた。この席で「山にはネコがいる」と聞いた。どうせマラリアで廃村になった所から、飼い猫が逃げ出し野生化したのだろうと思ってしまい、イリオモテヤマネコの発見には繋がらなかった。

このネコは、1965 年に動物文学者の戸川幸夫氏らが発見したと本土ではされているが、事実は異なる。それより以前、那覇の琉球大生物科の高良鉄夫教授が、1961 年の西表島農業調査で島を訪れて以来、ヤ

現在位置確認困難

マネコ(マヤー)に関心を持って居た。その後、西表西海岸の小部落:船浮で、池田稔氏が庭で発見、イノシシ用罠で捕獲した個体を、船浮の小学校の親富田善繁教諭が仲介して那覇の高良先生に送った毛皮標本を、戸川氏が見て、共に東京の科学博物館の今泉吉典博士に知らせた(高良鉄夫『琉球の自然と風物ー特殊動物を探る』琉球文教図書 1969 年参照)。船浮には、本当のイリオモテヤマネコ発見記念碑がある。標本は琉大博物館に現存する。今泉氏はネコ属分類の専門家ではなく、興奮したせいか、マスコミ向けに「イリオモテヤマネコは新種」と誤報してしまい大騒ぎになった。今では「アジアに広く分布するベンガルヤマネコの、西表島亜種に過ぎない」とされている。今泉氏が勇んで付けた新種の学名は、シノニムで無効であり、学界では認められていない。日本には、特に蝶のアマチュア研究家に、僅かな違いで 新亜種名を勝手に付け、命名者名に我が名を残そうとする、見苦しい人を散見する。いずれにしろ、イリオモテヤマネコは希少種であり、交通事故などから保護すべきなのは当然だが、このイリオモテヤマネコ発見史を見ても、本土側の沖縄への無知／差別、沖縄の人々を軽んじる姿勢が伺える。

4. 沖縄の自然の豊かさと固有種

イリオモテヤマネコなど、沖縄には独特の自然があり、鳥では 1981 年のヤンバルクイナの発見も有名だ。沖縄 W の後、沖縄の鳥を見ようと、今度は鳥(バードウオッチング)中心で行った。東大探検部の後輩で、日本野鳥の会の千葉県支部長、当時は厚かった機関誌『野鳥』の編集者、志村英雄さんが同行してくれた。ヤンバルの谷に分け入った夜奇妙な声がし、志村さんは「ヤンバルクイナかもしれない」と言う。実はヤンバルクイナは早朝によく鳴き、鳴き声は、「コッ コッコッ」などらしい。志村さんは日本では有数の鳥研究家で、日本で見た鳥も300 種以上(＝見られる鳥の大部分)なのだが、ヤンバルクイナは初めて見る鳥で、良く知らなかったのである。この声の主は、これも美しい渓流のカエル、珍しいオキナワイシカワガエルだった。結局ヤンバルクイナは見られず、西表に向かった。ここでは、名産のカンムリワシを見ることが出きた。初めて見た時は感動したが、余りに沢山いるので「カン、カン、カンムリワシ飽きちゃった」という歌までできた。別件だが、彼は日本で 300 種以上と観察数を威張っていたが、私はケニアで 300 種以上の鳥を見たので、計 500 種以上になり、彼はそれに刺激を受けたのか自分も外国の鳥も見に行くようになったようだ。なお昆虫では、1984 年にヤンバルテナガコガネが新種として記載されたが、大きな樹のウロに居り珍しいので、私は標本しか見ていない。この特徴のある黄金虫は、奄美にも別種が居る。

祖納の夕食

植物で言えば、ヤンバルはいわゆる照葉樹林で覆われる。照葉樹林帯は、夏期に多雨の温帯に成立し、葉の表面のクチクラが光って見えることから照葉の名が付いた。元来は中国南西部から日本列島にかけて広く分布して、概ね西日本の山地、関東地方南部の低地 － 低山帯、北陸地方・東日本の低地、東北地方の海岸部(特に日本海側)は、本来この種の森林に覆われていたと思われる。イタジイ、イジュなど高く育つ樹木が多く、その幹や枝には着生する多様なランの仲間が見られる。西表は、特に仲間川の岸は、マングローブのジャングルでオヒルギ、メヒルギなど ヒルギ科の植物で覆われる。山地にはサキシマスオウノキが目立ち、板根(樹木の地表近くからの側根の上部が、平板状に著しく偏心肥大し、樹木の支持の働きをする

根を言い。熱帯雨林の高木に多い）に支えられ、仲間川沿いなどには巨木がある。また花では、夜に咲き朝方に散る一夜花のサガリバナのピンクの花が夏に咲き、下の川に一面に散るのが美しいそうだ。サキシマツツジも綺麗だ。人家の回りにはパパイヤが栽培されており、いつも実をつけている。これら動植物相の豊富さを見ても、沖縄・奄美地域は世界自然遺産に指定されて当然と思う。

5. 台湾行きの途中とノスタルジックな沖縄 W 再訪、西表西部船浮港への旅

探鳥旅行から後、TWV 卒部後創った東大学術調査探検部で、台湾の蘭嶼(旧紅頭嶼)遠征を計画し、その予備調査で、金が無いので、基隆（キールン）行きの船に乗るため那覇に寄った。東大赤門会の西銘さんにも再会し、台湾の救国青年団宛の紹介状まで書いて貰った。台湾側団体と合同で行けば、スムースになると思ったが、日常の野外活動は余りしていないらしく丁重に断られた。台北の日本大使館には、同行の後輩探検部員の兄の東大時代の友人：加藤紘一さん（後に 2000 年、「加藤の乱」で森内閣打倒を目指した）が居て、なんと日中復交を予測し、外務省エリート人材だったのに、語学研修で中国語を勉強していた。お手伝いさんにも、自宅でも北京語のみを使わせる徹底ぶりだ。「中国人の飯の食い方を教えてやる」と、台北一の大飯店に連れて行かれた。大広間の端の席だったが、中央の大テーブルには何と蔣経国総統の一族が 30 人ほど卓を囲んでいた。驚いたことに、彼らは食べカスを吐き出すは、コボスは、卓上や卓下は汚れ放題。加藤さんは「これが中国本土の上流階級の食べ方だ」と言う。台湾は TWV の藤野さんが TWV 初の本格的海外遠征で台湾の名峰雪山（旧次高山）を目指したが、現地で入山許可が取れずに登頂できず、50 年後にリベンジ登山している。

十年ほど前、その藤野さんも、お互い正職をリタイアして時間が出きたので、昔の第 2 回沖縄 W で行けなかった西表島西部に一緒に行った。船浮の民宿に泊まり、船浮湾を宿の船で見て回った。1971 年に廃村になった網取の近くまで行き、また祖納に戻り、沖縄 W 当時歓迎会を開いてくれた旧・祖納部落区長の山田さんの家を訪ねた。TWV 隊の写真係だった藤野さんが岡崎隊メンバーの大垣さんに頼まれて写真を撮った美しい娘さんは、那覇に住んでいて会えなかったが、近々訪ねると言う母上にその写真を託した。

私はこのノスタルジックな沖縄 W 再訪直前に、蝶採り仲間と与那国島で珍しい偶発蝶を採集しようと試みた。採集後に石垣島で藤野さんと落ち合った。本島に戻り北に向かい、旧友の市田則孝さん（最盛期の頃の日本野鳥の会・常務理事。NHK 紅白歌合戦での勝敗投票で人数を直ちに数えて、日本野鳥の会がテレビで全国に有名になった）を、現在住んでいるヤンバルの喜如嘉部落に訪ね、泊めてもらった。部落は、糸芭蕉の畑や水田に囲まれ、昔ながらの民家が立ち並び「芭蕉布の里」として知られている。実は市田夫人は元々芭蕉布の専門家で、昔からこの部落に住んで、芭蕉布を織っていたのだ。市田さんは、庭に沖縄特産の蝶の食草を植えて、成虫を育てている他、地域の自然保護運動もしている。その後、琉大 WVOB 会長の嶺井氏の米製大型車で、ヤンバル山中にある琉大 WV の山小屋に案内してもらった。

終わりに

以上、とりとめも無く感じたことなどを、長々と書き流したが、何度行っても沖縄、特に八重山は美しく楽しく、勉強になった。OB/OG の皆様も一度行って見ることを、お薦めする。

（写真は 1967 年卒藤野浩一氏提供）

目次へ移動→